

カテゴリー：

成長する組織の理念・文化づくり

壁に掲げる言葉から、 判断に使える言葉へ

※航海図の使い方を示すために設定した、架空のケースです。



この記入例から分かること

最初に渡された依頼

会社らしい理念をつくり、
社員へ浸透させる。

事業の拡大に伴い、会社のミッション、
ビジョン、バリューを刷新したい。社
員に浸透させるため、社内ポスターや
動画、入社時のツールも制作したい。



立て直した問い

一人ひとりが、迷った場面で
判断できる基準をどうつくるか。

会社の価値観を、覚えるための言葉ではなく、
迷ったときに一人ひとりが判断できる言葉へ、
どう変えるか。

役割の変化

ポスターや動画を、理念を覚えさせるものではなく、
組織の言葉を日々の判断へつなぐ接点として位置づける。

その他、 さらに確かめること

- 社員が判断に迷うのは、どのような場面か。
- 現在の理念は、どのように理解されているか。
- 部署や役職によって、大切にしているものはどう違うか。
- 組織が過去に守ってきた判断や行動は何か。
- 新しい言葉が、制度や評価と矛盾しないか。

航海図 | ブリーフ・テンプレート

良いデザインは、良いブリーフから生まれる。ブリーフとは、目的地と現在地、そこへ向かう経路を示す航海図だ。この一枚を、いま取り組んでいる仕事やプロジェクトで埋めてみてほしい。すべてを埋める必要はない。この航海図は、埋まらない場所を見つけるためのものだ。埋まったところは、すでに慮りが届いている場所。埋まらないところが、これから問いを立て、確かめるべき場所だ。

プロジェクト名	記入者	記入日	更新日
壁に掲げる言葉から、判断に使える言葉へ			

一つの項目につき、一行を目安に。きれいな言葉でなくて構いません。自分たちが本当にそう思える言葉で書いてください。

01 誰のために 向き合う相手を、属性ではなく、一人の人間として捉える。 どんな一日を送り、何に心が動くか。	異なる部署や拠点で働き、会社の成長とともに仲間が増えるなかで、何を基準に判断すればよいか迷う社員。	
02 何のために この取り組みで、何を变えたいのか。 目的を、一つに絞る。	役職や部署を越えて、 日々の判断に立ち戻れる共通の基準をつくる。	
03 何が問題なのか その人はいま、何に困り、どこで立ち止まっているのか。 組織の都合ではなく、その人の側から書く。	会社の理念は掲げられているが抽象的で、 実際の仕事で何を選び、何を断るべきかにつながっていない。	
TNT— Truth / Need / Tension （人を理解する、三つの問い）		
04 Truth（真実） その人の生活や仕事の中にある、 変わりにくい事実や感情は何か。 組織の文化は、 掲げた言葉ではなく、 日々繰り返される小さな 判断によってつくられる。	05 Need（ニーズ） その人が、まだ満たせていない望みは何か。 表面的な要望ではなく、その奥を見る。 上司の確認を待たなくても、 自分の判断が組織の 目指す方向とつながって いると思える基準がほしい。	06 Tension（緊張） 「本当は〇〇したい。 けれど、現実には〇〇だ」を、一文で。 本当は、自分で考えて動きたい。 けれど、組織が何を大切に しているのか確信が持てず、 前例や上司の判断を待つでしょう。
07 届けるものが果たす役割 商品、サービス、メッセージ、場所、制度、取り組みなど。 届けるものは、その人にとって、どんな役割を果たすか。	理念を説明する標語ではなく、会議や日々の選択で 何度でも立ち戻れる、組織の共通の羅針盤になる。	
08 表現の幅 答えを一つに決めず、機能や手ざわりに近い方向から、 情緒や気分寄り添う方向まで、表現が動ける幅を示す。	具体的な行動例や判断の問いとして使える実務的な方向から、 組織が目指す未来を感じ、誇りや共感を育てる方向まで。	
09 作り手への問い この人のために、何を变え、何を形にするか。 最後に、一つの問いとして渡す。	誰も答えを持っていない場面で、一人ひとりが 同じ方向を選べる言葉を、どう形にするか。	

補助項目 / 必要に応じて確かめること

成功のしるし 何が起きたら、この取り組みは成功したと言えるか。 理念の言葉が、会議、意思決定、採用、育成、 振り返りの場で自然に使われ、 社員が自分の言葉で説明できること。	守るべきこと 守るべき条件、変えてはいけないものは何か。 経営陣だけで言葉を決めない。 現場の経験や葛藤を置き去りにせず、 社員を評価・統制するための標語にしないこと。
---	---

空欄は、失敗ではありません。
次に深めるべき場所を教えてくれる、地図のしるしです。

自己利用・自社の単一プロジェクトでは、許可なく利用できます。複数案件、組織導入、研修、第三者へのサービス提供には、TADへの事前相談と許諾が必要です。

© 2026 Tetsuya Takenomata. All rights reserved. | 企画・提供: TAKENOMATA ART & DESIGN (TAD)